

## 「学習と人生のつながり」を問える教育

山内薫

明治学院大学教養教育センター 助教

はじめに

私が教育実践を行う上で、最も重視していることは、私や私が担当する科目は、学生にとって、人生や生活の一部であるという教育実践の捉え方である。学生一人ひとりの人生や生活は、時間的・空間的に拡がりつづけている。私は科目担当者として、学生の人生における一瞬や一期に、教室や大学内で同じ環境を共有するなかで、「一人ひとりの人生や生活の一部でしかない私にできることにはなにか」を考えながら、日々、教育実践に取り組んでいる。

現在、私は、学部生(留学生・日本人学生)と交換留学生を対象とする日本語教育に関わる講義及び演習科目を担当している。この数年は、コロナ禍の影響もあり、担当するクラスはいずれも10名前後の小規模クラスとなっている。学生が1名や2名という、驚くような小規模クラスもあった。

以前は、海外の大学での日本語専攻学生を対象とする300名前後の大規模クラスの担当や、日本国内の大学で日本人学部生を対象とする200名前後の大規模クラスを担当したこともある。しかし、私は、1クラスの人数が少ないほうが、制約が小さく授業を進めやすいというわけでもないと感じている。また、その逆でもない。教室という「環境」は、その場に集う学生によって、また、対面、オンライン、ハイブリッドなどの授業形態によっても変容する。私は、毎学期、そこでつくられる「環境」において、学生が「自分が選び、学習する(した)経験は、自分の人生にどのような意味があるのだろうか」と問うことができるような教育実践を行いたいと考えている。その思いのもと、授業の準備をしたり、教室で講義したり、学生たちと雑談したりしている。

私は日本語教育学を専門としている。大学教員・研究者として活動する中で実感しているのは、前述したような日々の教育実践、教育理念の捉え直し、研究は常に連動しているということだ。研究においては、国内外の大学の勤務経験より、大学で日本語を学ぶ学生を対象とする「『ことば』の学びに寄り添う日本語教育」について探究している。その研究を踏まえ、担当科目においては、一人ひと

りの学生が「学習と人生のつながりの軸」を形成し、意識化することで、生活から人生へと視野を拡げられるような日本語教育実践を目指している。

以下、前述したような教育理念に基づく2つの教育実践を紹介する。

#### 1. 「学部留学生の就職活動に関わる科目」

1つ目は、現在担当している「学部留学生の就職活動に関わる科目」(2年次以上対象)である。

本科目は、学部留学生が必修科目または選択科目として履修する講義科目である。具体的には、春学期に①自己分析を通じた将来的な目標の設定、②就職活動を複数の立場・視点(日本人学生との共通点や留学生特有の点など)から理解・検討することに取り組んだうえで、秋学期に(1)志望業界・企業の決定と志望理由の可視化、(2)履歴書やエントリーシートの作成を行っている。

就職活動に関わる講義科目という点、おそらく企業から内定を勝ち取ることが到達目標としてイメージされるであろう。また、授業では、留学生が就職活動に向けた事前準備として、日本語力を鍛えることが重視されると思わ

れる方も多いのではないだろうか。実際に、外国語教育においては、従来、言語的道具としての「ことば」の獲得に価値が置かれる傾向が強い。教員からも学生からも、単語をどのくらい暗記できたか、ネイティブスピーカーとどのくらい会話できるかなど、学習した言語が将来において「使えるあて」がある言語となることが評価される。同様に卒業後のライフプランとしての就職活動や大学院進学に関わる日本語教育においても、内定や合格といった目標の達成が重視されることが多い。しかし、学部留学生に対する就職活動支援としての日本語教育は、ライフプランの再構築を目的に学部留学生の葛藤に寄り添い、「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化を支援する日本語教育である必要がある。なぜなら、学部留学生は内定や合格を目指す以前に、留学前あるいは大学入学前に描いたライフプランを壊し、再構築することが困難であるがゆえに、就職や大学院進学を見定め、日本での生活を継続することを踏まえ、たライフプランの構築に十分に取り組めていない、または、取り組んでいる途中である場合が多いからである。

「学部留学生の就職活動に関わる科目」において活動を行うにあたり、両学期を通じ、次の2点に留意した。

(1)学期前半では、「生活」を軸に、「いまの自分」への関心を促す。具体的には、学生に、大学での専門分野や履修科目、大学内外の活動や人間関係という空間的な「移動」からつくり出された経験や感情をふり返ってもらう。その際、ふり返りの内容、履修者の数や様子などに応じ、共有の方法を変える(個人からペアやグループへという手順/その逆の手順、各学生と教員/全体)。

(2)学期後半では、「生活」に加え、「人生」を軸に、「学習と人生のつながり」と将来像への関心を促す。具体的には、学生に、(1)の空間的な「移動」と「大学入学前—いま—卒業後」の時間的な「移動」を統合し、空間的な「移動」という経験)と時間的な「移動」(という経験)を一つの物語として編み直してもらう。そのうえで、学習観や人生における価値観を表現できるような問いと向き合いつつ、「学習と人生のつながりの軸」の形成から将来像の構築に至る過程を可視化してもらう(時間的・空間的な「移動」の軌跡に関する記述や図示化)。

なお、作成された成果物に対し、教員から日本語面のフィードバックを受けることで、日本語力を鍛えることや就職活動に向けた事前準備を行うことを履修の動機づけと

する学生が安心感と満足感を得られるよう配慮した。また、作成した成果物をポートフォリオとして蓄積することを通し、自分自身と向き合いながら授業活動に取り組んだことは、一人ひとりの学生にとって、「学習と人生のつながり」を問うたり、深めたりするきっかけとなった様子であった。

## 2.「口頭表現トレーニングに関わる科目」

2つ目は、2017〜19年度に他大学で担当していた「学部生の口頭表現トレーニングに関わる科目」(1年次対象)である。

本科目は、経営学部の学部生が選択科目として履修する演習科目(春学期のみ)である。具体的には、全15回の授業のうち、学期前半では、待遇コミュニケーション論、コーチング技法やプレゼンテーションの方法などを、実践を通して学ぶ。学期後半では、前期に学んだ知識や技法を活かし、ライフストーリー・インタビューを行う。

「口頭表現トレーニングに関わる科目」において活動を行うにあたり、次の2点に留意した。

(1)学期前半(第9回まで)では「生活」を軸に、学生に身近な日本語という「ことば」への注目、及び「ことば」と表

現の関係性に対する意識化を促す。具体的には、大学入学前／いまの生活において、どのように「ことば」を用いていた／いるか、また、どのような他者と、どのように交流をつくりだしていた／いるかという観点から、自身の生活をふり返ってもらう。

(2) 学期後半では、「生活」に加え、「人生」を軸に活動が行われる。学生は、他者のライフストーリーを聴くために、まず、自分自身の関心を意識化したうえで、その関心に基づき、テーマや相手、質問項目を検討する。つぎに、それまでに培ってきた自己表現力を活かしつつ、インタビューを行った上で、そのインタビューを文字化し、レポートとしてまとめる。

授業を実施するにあたっては、表現と理解を行き来することで、学生自身で自己表現力を育てていき、段階的に自己、そして他者との関係について視野が広がっていくことを実感できるようにところがけた。学生にとって、他者のライフストーリーを聴くことを通し、自己や他者の人生に意識を向けることで、自身の視野が生活から人生へとさらに広がるきっかけとなった様子であった。

## さいごに

これまでに教育実践の紹介を通して言及してきた「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化、「生活から人生への視野の拡がり」といった視点は、日本語科目のみならず、大学の外国語科目、口頭表現やアカデミック・ライティングといった「ことば」に関わる科目、アクティブ・ラーニングに対応する科目、あるいは非対応の科目をデザインする際にも重要であろう。

クラス規模や履修者数、流動的な授業形態、さらに学生一人ひとりの多様性などが複雑に絡み合い、日々の対応に追われると、時として、それらを制約や問題点、懸念点と感じざるを得ないこともある。しかし、教室で学生に逢うと、学生が「学習と人生のつながり」を問える教育は、どのような場面でも考えていけるということに、改めて気づく。

今後も講義や演習を行うにあたり、一人ひとりの学生の人生における一瞬や一時期に、教室や大学内で同じ環境を共有することができること、そしてそこから私自身が学びを得られることに感謝する気持ちを忘れずに、授業実践に取り組んでいきたいと願っている。